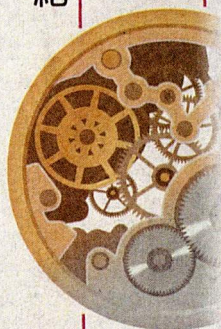


# 越境精神

小長谷 有紀



## 梅棹忠夫の残したもの

11

## 未来のウメサオたちへ

梅棹忠夫は晩年に失明してからも、さかんに執筆活動を続けたが、外出はままならなくなった。まして遠出は少なくならざるを得ない。

海外渡航としては、1997年夏、国際モンゴル学会の名誉会員に推薦され、その授与式に参加するためにモンゴル国を訪問した。それが、失明後最初の、そして人生最後の、外国旅行となった。

式典後に草原へ出向いた梅棹は、「草原の景色はみえなくても、かぐわしい草のかおりを胸いっぱい吸いこんで、わたしはひさびさにフィールドを実感した」と自伝『行為と妄想』で述べている。

青春の情熱をかたむける対象があったこと、そして晩年にその場所を再訪することは、目が見えていても誰にでもあるチャンスではない。だから、モンゴル再訪は本当に幸せなひとときだったにちがいない。

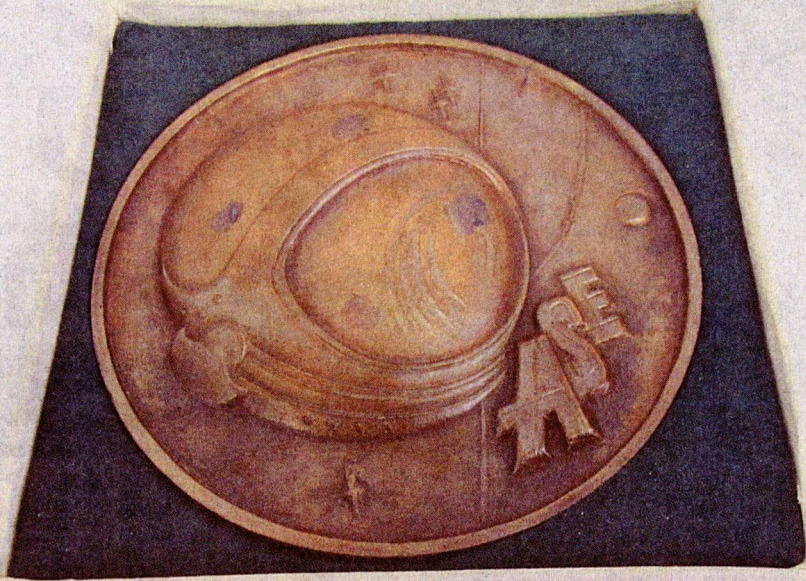
ちよつとごとき私はモンゴルで調査中だったが、遠く離れていたため、同行できなかった。私に

## 挑戦する領域は無限

できることは、モンゴルについて彼が書き残した資料を研究することである。

一方、国内については、200

3年秋、世界宇宙飛行士会議が日本で初めて開催される時、毛利衛氏らに要請されて基調講演をすることとなり、日本科学未来館に出かけたのが、東京行きの最後となった。



宇宙探検家協会から梅棹がもらったメダル。初めて宇宙遊泳をしたレオノフ飛行士によるデザインといわれている

翌年の春に検査入院をした際、肺癌が見つかり、摘出手術をしたり、続いて胃癌についても手術をしたりするうちに、遠出ができなくなってしまうたのだった。

未来館での講演のタイトルは「地球探検家から宇宙探検家へ」である（『山を楽しむ』所収）。地図上の空白地帯がなくなっても「人類が挑戦する領域」は決してなくならない。例えば、深海や宇宙がある。深海はまだしも、宇宙とまでいって、登山や地上の探検からかけ離れているように思われるかもしれない。しかし、地上の探検と宇宙との中間に、南極観測のような極地探検をおいてみよう。国家的あるいは国際的プロジェクトとして両者はつながるだろう、と説明した。さらに、何よりの証拠に、その国際会議で宇宙飛行士たちはスペース・エクスプローラー、すなわち宇宙を探索する人と呼ばれているのだった。「探検の伝統的精神」がまさに地球外へと展開しているではないか。そんな祝福のメッセージが基調講演に込められた。

21世紀はまだ緒にいたばかりだ。未来のウメサオタタオたちはどこで生まれるだろうか。彼ら彼女らをはぐくむ揺りかごはどんな探検だろうか。

（国立民族学博物館教授）